
GANTZ ASTRAY

やっばい。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ ASTRAY

【Nコード】

N2521BA

【作者名】

やっばい。

【あらすじ】

ASTRAY・・・それは王道ではない物語。謎の黒い玉「GANTZ」に召還された主人公、秋本 裕也は星人を倒す命懸けのミッションを強制され参加せざるをえなくなる。果たして裕也は、この理不尽な戦争を生きのびる事が出来るのか？

M i s s i o n - 0 0 1 「ぶ33-ぐ・・・てきな」(前書き)

二次小説、面白そうなので始めてみました。

評価の高い「GANTZ」の二次作品です。

素人ですが、なにとぞよろしくお願いします。

今回はプロローグなので短いです。

M i s s i o n - 0 0 1 「ぶ33-ぐ・・・てきな」

いきなりだが・・・

ワタクシこと、秋^{あき}本^{もと}裕^ゆ也^やは餅を喉に詰まらせて窒息死しました。

終わり

・・・って、ウオイ！開始4行でエンドロールとか前代未聞過ぎる
だろ！

目の前に広がるは、殺風景なマンションの一室。

部屋の真ん中には、ヘンテコな黒い玉。

そして何故か触れられない窓からは、おそらく日本で最も稼いでいるであろう娯楽施設、ネズミーランドの名物の1つツンデレラ城が見える。

いや、青と白の装飾を施されたその夢のお城とやらが無駄にライトアップされていて、なんとも神々しい感じを演出していた。

ホント綺麗だなあゝ・・・いかん、現実逃避していた。

・・・というか、これは現実なのだろうか？

もしかしたら、死ぬ前に俺が見てる夢かなんだろうか？

そうだな・・・窓や玄関に触れないってどんなビックリ現象だよって話だもんな。

語弊が無いように言っておくと、俺は別に縛られて監禁されている・・・訳ではない。

五体満足、ついでに喉に何かが詰まってるという感覚も無い。

それどころか、餅が喉に詰まったときに自分で付けた首の引っかき

傷も綺麗さっぱり消えていた。

「へえ・・・今回は新人が先に来てたみたいね。」

急に背後からかけられる女性の声。

しかし裕也の中に微かな緊張が生まれる。

そう、先ほどまでこの部屋には裕也ただ1人しかいないはずだったのだ。

加えて、窓もドアも何故か開かない・・・というか触れられない。

急に女性の声がしたというほうが不自然なのだ。

裕也は唾を飲み込み意を決し、ゆっくりと振り返る・・・そこには、黒い玉から照射されてる青いレーザーから頭部から徐々に姿が現れてきている黒髪ロングの女性だった。

顔つきだけを見て20代前半くらいだろうか・・・裕也は判断する。

若干つり目になっている、その目から力強い意思が感じ取れる。

彼女の身体がヘンテコな黒い玉のある部屋に上から徐々に現れていく。

形のいい綺麗なピンク色の唇、巨乳・・・とまではいかないが、それなりに大きな女性の象徴、ほっそりとした腕に括れた腰、モデルのような長い足。

街中を歩いていると間違いなく男性の目を引くほどの美人であること間違いなしだった。

・・・普通の服ならば。

かくいう、裕也も見とれていた・・・のだが、それは顔が現れたときまで問題は服だった。

首から現れていくたびに、裕也が若干だが引き始める。

そう、彼女の服は身体に張り付いているといってもいい程のピッチピチのライダースーツの様な黒いコスプレスーツだった。

全身が現れた黒髪の美女は裕也の方に向き言葉を放つ。

「いきなり、変な部屋に放り込まれて訳が分からないだろうけど混乱しないで。私達の言うとおりにすればここから出られるから・・・」

女性は真剣な顔に真剣な声で裕也にファーストコンタクトを試みる。

で、裕也の返した言葉は・・・、

「へ・・・」

「へ・・・？」

「変態だああああああ!!!!」

「ええええええええええっ!?!」

指を指して絶叫という、あまり好ましくない言葉を返した。

Mission-001 「ぶ33-ぐ・・・てきな」(後書き)

〳〵後書きという名の作品補足〳〵

本サイトの規約は一応読みましたが、どこまで著作権大丈夫なのか心配だったので、意図的に変えました。

アウトだったら、修正しますので教えていただけたらと思います。

さて、今回の補足ですが特にありません。

強いてあげるなら、舞台が千葉ということぐらいですかね。

〳〵登場人物紹介〳〵

あきもと
秋本 裕也 ゆつや

本作の主人公。 19歳。

大学入学後初の冬休みを満喫中、餅を喉につまさせ死亡しGANTZに召還される。

高校時代はサッカーの特待生としてブイブイ活躍していたため、運動神経はいい。

高校までサッカー一筋だったため彼女はなし・・・つまり、童てry。

2年次のインターハイにて膝に深い怪我を負い、プロの夢を諦め県内の大学の経済学部に入学する。

M i s s i o n - 0 0 2 「それぢわ ちんそうを はじめる」 (前書き)

とりあえず続きが出来たので投稿したいと思います。

Mission - 002 「それぢわ ちんそうを はじめる」

「ちょっと！こんなカツコでいきなり現れた私が言うのもなんだけど、いきなり指を指して『変態』はないんじゃない!?」

「う．．．。」

黒髪の美女に凄まれ、ばつが悪そうにする裕也。

やはり彼も男、女性をこうも不機嫌にさせてはやはり居心地は悪いのだろう。

意を決し、謝罪の言葉を口にしようと口を開いた。

「ごめ．．．ん？」

「おっ！今日は沙綾ちゃんが早かったねえ。」

ジジジという音と一緒に沙綾．．．おそらく裕也に目くじらを立てている女性だろう、の後ろに先程と同じく青いレーザーの光に当てられて人の肉体が現れる。

さつきと違うのは、今回は中年過ぎのおじさんということ。

髪はうすくなり始めて、若干だが腹も出ている。

そこら辺歩けば1人は見かけるであろう、中年体型の持ち主だった。

そして、同じなのは．．．このおじさんも沙綾と呼ばれた女性と同

じピッチピチなスーツを着ているのである。

まあ、こんな訳の分からないSFチックなのが次々と起こる不思議空間に突如放り込まれた裕也は・・・

「へ・・・」

「「へ・・・？」」

「変態が増えたあああああ！！！！」

「まだ言うかつ！おのれはああああ！！！！」

「へ・・・変態って僕のこと？」

「しかも、ピッチピチスーツでペアルックウウウウツ！！！！」

「ペアルックとか言うなあああ！！！！」

「援交だ、援交！！！！」

「もう、口閉じろおおおお！！！！」

理性を捨て、場の流れとノリで口を開くことにした・・・。

「今回は、新人アイツ1人だけみたいなんだな。」

「そうですね、今まで新人の人達ってボク達既存メンバーよりも早く来てましたし・・・。」

「追加メンバーが1人って、補充されたという事はそれなりに強い星人って事ですね？」

「多分だけだな・・・まあ、こつちとしちゃガラの悪いヤツがバカやって、必死になってる俺らの邪魔になるってよりかはマシだな。」

「でも、いい子じゃないか。こんな場所で漫才みたいなのが見れるなんて夢にも思ってたしな・・・。」

中年おじさんの後から現れた五人の男女が思いをそれぞれ口にする。

一番最後に口を開いた若い男性が顔を引き締め、黒い玉の前に立ち・・・一言。

「・・・そろそろだ、気を引き締める。」

男の顔からは伝わってくるほどの緊張感がにじみ出ていた。

場の雰囲気感化された沙綾は気を引き締め、つられる様に裕也も静かにする。

顔は未だに訳分かんねえ・・・という表情だったが。

訪れるしばしの沈黙。

「えっと・・・なにが始まるんだ？」

裕也は痺れを切らし目の前の黒い玉の前に立つ男に話しかける。

男は裕也の目を真っ直ぐ見つめ何かを待っている。

そして、男が横にズレ裕也の瞳に黒い玉の正面が移る。

その時・・・、

かあゝごおゝめえ かあゝごおゝめえゝ

かあゝごおのお なあゝかあのお とおゝりいゝはあゝ

「・・・歌？」

「童謡・・・かごめかごめって聞いたこと無い？」

「ガキの頃に幼稚園の遊戯でやったぐらいしか・・・。」

裕也の疑問に沙綾が律儀に答える。

裕也は今になり先程の暴言にビクビクするも、沙綾は既に気にして

ないようなのでホッとしていた。

まあ、最も当の沙綾本人はこれから起こることに頭が一杯なため、記憶の隅にやってるだけだが・・・。

「ん？表面に何かが浮かび上がってきたぞ？」

裕也が凝視する玉の表面に突如、緑の文字が浮かび上がる。

□

てめえ達の命は

無くなりました

新しい命を

どう使おうと

私の勝手です

という理屈なわけだす

□

「・・・だす？」

「多分、ですの事よ。いい加減なの・・・色々。」

「そろそろ、ターゲットが出るぞ。」

「ターゲット？」

裕也が玉を見ているとまた別の文字が浮かび上がっていく。

☐

てめえ達はこれから

この方をヤツつけに行って下ちい

ゴリラ星人

特徴

つよい

類人猿

好きなもの

クイズ、バナナ

口ぐせ

問題！！

ウホッ

㊤

そして最後にでてきた証明写真のようなものには、身体の所々がサイボーグかしたゴリラが映った。

「えっ？コレ、どこのサイヤ人？」

「写真はあまり、鵜呑みにしない方がいい。当てにならないからな。・・・開くぞ。」

男が行った瞬間、黒い玉の左右と後ろが飛び出し、展開する。

よく見ると右側にはアタッシュケースみたいなものが、置かれていた。

「どういう、仕組みになってるんだ・・・これ。」

裕也が近づき、玉の中をのぞく・・・すると、そこには

「・・・・・・・・なに、この白いおっさん。」

「意外に度胸が据わってるんだな、新人。驚くことすらしないなん

て。」

「いや・・・、なんかもう、色々ついていけなくて。大体ココは何なんです？」

「へ？お前、何も聞かされてないのか？」

「何をです？」

「何ってお前、ココの事とか色々と・・・おい、高木。お前、先に来てて何も説明してなかったのか・・・？」

男が後ろを向き高木・・・先程、沙綾と呼ばれてた女性を見る。

そして、沙綾は「う・・・」と言葉を漏らし目を背ける。

男は溜息を1つ吐くと『あきやまくん』と書かれたケースを取り出し、裕也に渡す。

「一から話してやりたいが時間が無い、生き残りたかったら急いでコイツに着替えてくれ。お前が疑問に思ってること、簡単だが大まかに話そう。」

そう言い、裕也に玄関で着替えてくるように指示を出し、廊下に向かう。

廊下を曲がる前に男は壁に背を当て、腕組をする。

「この距離なら、玄関まで声が届くだろう。」

「・・・・・・・・。」

「どうした？」

「これってマジですよね？」

裕也の問に男は真っ直ぐ目を見て、

「・・・・ああ、大マジだ。」

「・・・・着替えてきます。」

「俺は説明が下手だからな、そちらからいくつか質問をしてくれると助かる。・・・・何が聞きたい？」

「じゃあ、ココは千葉の舞浜・・・・で合ってますよね？」

「ああ、それは間違いない。」

「俺は何でココに居るんでしょう？」

「ム・・・・それに答えると君はおそらくショックを受けるだろうが、絶対に着替えに手を緩めるな。そのスーツを着ることを優先しろ。」

「あ、はい。・・・・てか、このスーツなんだ？所々に吸盤みたいなのが付いてる。」

「ソイツは『GANTZスーツ』これから行く、星人を倒すミッションで君の体を守ってくれる鎧みたいなものだと思ってくれればいい。」

「星人を倒すつてのは、さっきのゴリラ星人つてやつですよね？」

「そうだ。」

「『GANTZ』っていうのは？」

「部屋の真ん中に黒い玉があったろう、誰がつけたかは知らないが『GANTZ』と呼ばれている。」

「・・・ガンツ。」

「GANTZには死んだ人間を生き返らせる能力がある。その能力でミッション・・・星人を倒す戦いが始まる直前に死んだ人間をココに呼び寄せ、手駒にする。」

「ココからは・・・逃げられないんですか？」

「GANTZは呼び出された人間のミッション前の逃走を阻止するために部屋から出れない仕掛けを施してる。窓やドアノブに触れないだろう？それもGANTZのせいさ・・・。」

「そうですか・・・。」

「心配するな・・・ココから出たきゃ「秀さん!!」どうした。」

話を切り、居間のほうへ向かう秀さんと呼ばれた男。

着替え終わった裕也は足音を聞くと同時に

「ココからは逃げられない・・・。」

そう呟き、ドアに背を預けゆっくりと目を閉じた・・・。

『

行って下ちい

00:59:59

』

居間に呼び出された秀はGANTZに浮かび上がった文字を見た。

「・・・始まったか。轟、GANTZバイクを持っていってくれ！」

「ラジャー!!！」

「如月、君は新人の分の武器を持っていってくれ、銃と剣を1つずつ。」

「分かりました。」

「秀さん、私は？」

「高木・・・お前は今回、敵を1体倒したら、ステルスで制限時間まで隠れてろ。」

「な、なんですか！私だってちゃんと戦えます！！」

「おまえはっ！今、99点なんだ。今回のミッションで死にさえしなければ、確実に解放されるんだよっ！」

「目の前で星人に殺されそうになっていた人を見つけて、助けられるのに自分のためにだけに隠れていた時に、みんなの中の誰かが死んだとしたら・・・私、きっと後悔すると思うんです。」

「・・・・・・・・。。。」

「私は点数云々の前に仲間と生きて帰って来たい。・・・そう思うんです。」

「わかった、なら新人を守れ。」

「え・・・・？」

「全員で帰るんだろう？一番きつい仕事ができるか？」

「はいっ！」

「いい返事だ！如月、新人の武器を高木に渡せ。早くも御役交代だ。」

「はい！」

沙綾は如月と呼ばれた女性から武器を受け取ると、裕也のいる玄関へと向かった。

「フッフ、上手いこと言つて。結局後ろに下がらせるんじゃない。」

「まあな、こうでもしないと高木はひかないと思ってな。・・・優奈。」

「なあに？」

「高木を死ぬ気で守るぞ。アイツは今度こそ100点を取って解放されなくちゃいけないんだ。」

「「秀さん!!」」

神妙な面持ちで優奈という名前の女性と秀さんと呼ばれた男はバイクの準備に向かった、轟の方へ向かう。

「どうした、轟？」

部屋に入ってきた秀に、メガネをかけた太りに太ったまん丸の青年の轟は消えかかった右手を見せる。

「転送が始まりました!」

「よし、高木に新人。聞こえてるか!?俺達は・・・全員で生き残るぞおお!」

「「「「「おおおおお!!!!!!」」」」」

気合の雄叫びを上げ終わると同時にバイクにまたがった轟の姿は無くなっていった。

「よし、向こうに着いたらコントローラーで最低でも2人組になって行動するん「秀さん!」どうした、高木!？」

秀は沙綾の声がした玄関の方へ急いで向かう。

「どうした高木!？」

秀が見た感じどこにも異変がない・・・玄関はいつもどおり開かずの沈黙を守っている。

そして、ここであることに気が付く・・・そう、「コ」にまだいると思ってた人物がいないのである。

「・・・高木、新人はどこだ？」

「・・・私が来たときには、もう・・・いなかったんです。」

「クソッ!まさか、最初に送られたのか!？」

「秀さん、必要なことは全部話しなすよね!？」

「ああ、全部話し・・・」

「秀さん？」

「しまった・・・頭の中の爆弾のことを話してない。」

「そんな、どうするんですか！もし、知らずにエリア外にでも出た
りしたら・・・。」

2人の脳裏によぎるのは、つい先程守ろうと言ったばかりの人間の
最悪な最期の光景だった。

そうこうしてるうちに、沙綾の転送も始まる。

「高木、とりあえずは新人を探んだ！」

「分かりました！」

そう言っていると高木は戦場へと旅たち、秀は今にあるGANTZからシ
ョットガンと捕獲用の銃を左右の手にそれぞれ持つと、自信の転送
を待ちGANTZに向かう。

「GANTZ・・・俺は仲間と必ずココに帰ってくる。テメエの事
情で巻き込まれた理不尽な戦争に俺達は絶対に屈しない！」

・・・そして、部屋には誰もいなくなった。

0
0
:
5
8
:
1
2



Mission - 002 「それぢわ ちんそうを はじめる」 (後書き)

ⅡⅡ 登場人物紹介ⅡⅡ

高木 たかぎ 沙綾 さあや 【ゴリラ星人ミッション開始前の得点 99点】

おそらく本作のヒロイン。23歳。B83/W53/H83

スタイルと顔のいい黒髪ロングの美女。

現在社会人1年目。スポーツセンターの受付嬢をやっている。

仕事の帰りに飲酒運転の車に轢かれそうになった子供を助けようとしてGANTZに召還される。

ゴリラ星人ミッションの召集で計9回目の召集となる。

大場 おおは 秀彦 ひでひこ 【ゴリラ星人ミッション開始前の得点 21点】

愛称『秀さん』で知られる千葉GANTZチームのリーダー。39歳。男性

元々警察官だったが、とある立て籠もり犯を説得しようとするも逆に殺され(俗に言う殉職)GANTZに召還される。

ゴリラ星人ミッションの召集で計14回目の召集となる。

現千葉GANTZチームで最も古参。

点数が低いのは、民間人を守る警察官の意思からなのか、点数を譲っている為。(他のメンバーの点数が高いのもその為。)

轟 誠一郎

【ゴリラ星人ミッション開始前の得点 42点】

外見を一言で表すとメガネデブ。17歳。男性

中学時代までは痩せていたが、卒業式の日に憧れの女の子に告白するも玉砕。やけ食いに走ったためデブになる。

しかし、中学時代は剣道をしていたため、動けるデブである。

高校在学中に中学の友達と遊びに行った海で、動けるデブのサーフィンを披露しようとしたら溺れてしまいGANTZに召還される。

ゴリラ星人ミッションの召集で計4回目の召集となる。

如月

天華

【ゴリラ星人ミッション開始前の得点 64点】

背は低く（慎重138センチ）、ロリッコ体型でとても可愛い顔をしている。・・・だが男だ。18歳。

日課のランニングで高層マンションの下を走っていたら上から植木鉢が落下してきて死亡。GANTZに召還される。

ゴリラ星人ミッションの召集で計7回目の召集となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2521ba/>

GANTZ ASTRAY

2012年1月8日01時50分発行